

新田開発に生涯をかけた 「松本彦平」氏

洲崎 富士夫

一、新田開発の概要

高島市にある箱館山スキー場の近くに、伊井・酒波・平ヶ崎・構の四集落があります。

かつて、この地域はわずかばかりの田畑と多くを占める原野（荒地）が広がっていました。そのため、昔から、このあたりの住民は、この荒地を水田に変え、米の増収によって豊かな生活をしたという強い願いがありました。

しかしながら、この地がやや高台にあったため（岡とよばれていた）、周辺の河川から水を引くことができず、開発を進める用水の確保が困難なためなかなか工事を行うことができませんでした。

そのような中で、地域の人々の長年の願いを実現するために、大正二年（一九一三）四集落は、淡海耕地整理組合を立ち上げ新田開発に乗り出しこの難工事を開始しま

した。その先頭に立ち、多くの苦勞を重ねながらも、その事業を成し遂げるため尽力した人が松本彦平氏です。

松本彦平氏は、安政三年（一八六五）六月一五日に高島市今津町日置前（平ヶ崎）で生まれました。みんなに親しまれ、信頼される人であったといわれ、後に、川上村長や郡会議員を務められるなど地元の名望家でもありました。

彼の指導のもと工事は以下の大きく三部で進められました。

①箱館山の西方にある高所、奥深い山中である赤坂山川原谷に貯水量一三二万m³の人造湖「淡海湖（処女湖）」を作りました。

工事現場が山麓より高所・遠距離のため資材等を運ぶには大変な苦



淡海湖全景

勞がありました。また、冬期は豪雪地であるため工事ができず工事期間が伸びました。

②貯水池（淡海湖）から、水をふもとへ流すための隧道（通水トンネル一三三三m）を作りました。地質がトンネルを掘るには、不向きだったため、落盤事故が相次ぎ予定ルートの変更を余儀なくされることもあり、硬い岩盤に当たると一日で一五cmしか進めないこともあるなど難工事の連続でした。

③淡海湖（貯水池）と隧道（通水トンネル）が完成するといよいよ新田の開発が始まり、今まで荒地だった土地が七〇町歩（最終的には約一〇〇町歩）の田圃に変わり、長年の地域の人々の願いが実現しました。

二、指導者としての松本彦平氏

この大工事には、莫大な資金が必要（銀行等からの借入には、村人の田畑、財産等を担保にする）だったため指導者松本彦平氏にとって、工事の完成を危ぶみ反対する人々を説得したり、資金調達（工事の延長、物価の上昇等で経費は増え続けた）に奔走したりする日々が続きました。しかしながら、大正八年（一九一九）六三歳で工事の完成を見ずに亡くなられました。（この工事は長男松本彦五郎氏に受け継がれました）。昭和一一年に完成しました（その後も修理等続く）。

三、先人の努力への感謝

この工事の完成により約一〇〇町歩の新田が開発され、地域に豊かな恵みをもたらしました。川上祭の祭礼が行われる場所（高島市今津町日置前）に「淡海恵郷」という顕彰碑文が建っています。その碑文には、難工事の概要や完成に向かって尽力した松本彦平氏など多くの人々の苦勞の他、「今後、先人の苦しいたがいの跡を思い出し、奮い立ちあがろうとする気持ちが起こることを本当に願い、わけをここに記します。」と後世の人に向けて書かれています。先人が築いてくださった恩恵に感謝することの大切さを強く感じさせられます。

フォト ニュース



安曇川町内小学3年生の「立志祭」
(安曇川公民館 3月7日)
(保木隆氏 撮影)

